

2013.12.1

現代俳句千葉

111号

巻頭エッセイ

変貌の故郷と第二の故郷

事務局次長 高橋宗史



東川（あずまがわ）という川が私の生家前を流れていた。狭山丘陵の北端に生じた、その川は地形によって多少は狭くなったり広くなることはあったが、概ね三メートル程の中、深さ十センチ程の小さな流れである。十歳の私は、春を感じ取ると笹とバケツをいち早く抱え、川に入る。掻い堀りといつて淵の部分で大小種々の石で囲み、水

を掻き出す漁獲法で鮒やみやこたなご、稀には鰻を手にした。奇怪な姿のヤゴもいて、これには内心恐怖の声を上げたが、ヤゴは蜻蛉の幼虫で、その棲息は清流を証明している。ある日、小学校の帰りにテストの点数の悪いのは橋から投げ捨てた。それを東川が受けとめてくれる。偉大な存在である。もっとも翌朝、高橋の名が付いたテストが大きな石に引っかけたり、水に濡れつつ一部などはひらひらと揺れて人の目を引くのを発見、焦ったけれど。
生家の前に行く東川は上流に位置し、その後二つの川に合流、東京湾に注ぎ込む。清冽な流れだった。故郷はまた、丘陵を成す故に坂の多い町で好きだった。いわゆる武蔵野のメッカとも呼ぶべき土地で、樞やくぬぎの類の落葉樹林が多く春秋それぞれの美を見せた。

一九六〇年代後半から宅地化が進み人口が激増した。町は標高八メートルの林を切り開き、上っていった。工場廃水、生活汚染水、農業の流入。東京近郊のどの川もがその潮流から免れられなかったように東川からは鮒もたなごも鰻も消え、絶滅していった。決定的だったのは兩岸のコンクリート化だった。呼吸できず川は死んだ。詩を書き始めたのはそのころだった。仲間の中には俳句に情熱を燃やす者がいたが私は駄目だった。要領が悪く切り捨てることができないうのだった。

やがて千葉県の最北西部に移住。今でこそ住めば都、「第二の故郷」とこの地を実感する。しかし四十代に入ってもこの平坦な土地に違和感を持つ甘えん坊がいて、第一と第二の故郷の相違を歌ったりした。
【雪は武蔵野の枝々をすり抜け／舞い着地する／一面に白の丘陵をなし／ゆたかな量となる】
【だが 北総の森林は／密集した針葉樹が地を守る】（詩「永久の雪の末に」抜粋）
以来、同人誌「北総四季」に下手な小説や詩を書いていたが、退職の前年に転機が訪れた。市の「俳句講座」に出席、実籾繁氏の指導を受けた。私にとつての新たな表現形式を得たのだった。俳句の難しさを知りつつも、己を論している。第二の故郷で俳句を楽しめる段階まで登って行こう、と。

目次

変貌の故郷と第二の故郷	高橋 宗史	1
秋の吟行会	加曾利貝塚—縄文の林を歩く—	2～3
諸家近詠		4～6
私の感銘句		6～7
新会員・会友紹介		7
津田沼、青葉、柏研究句会報告		8～9
図書紹介／会員・会友の近況		9～10
掲示板		10

秋の吟行会

加曾利貝塚―縄文の林を歩く

会場 千葉市桜木町東部自治会館 平成二十五年十月二十日

朝から、大雨注意報が出るほどの雨の中、五十名の方が参加。受付を済ませた後、三々五々、加曾利貝塚公園に向かった。晴れていれば広い公園を気持ちよく歩くことも出来ただろうが、この雨では加曾利貝塚博物館を中心に見学するのがやっと、という感じだ。

ボランティアの方の丁寧な説明を聴きながら館内を回り、縄文時代の人間の生活に思いを馳せた。雨に加えて寒さも募り、早目に句会場の桜木町東部自治会館に向かわれた方も多い。囁目二句を投句後、会場で昼のお弁当を頂く。

句会前に、会場をお借りするのにお骨折り頂いた千葉市立桜木小学校の佐藤修校長先生よりお話を伺い、その後、そのお話を踏まえて、俳句の実作や鑑賞についての懇談会が開かれた。有意義な時間であった。生憎の大雨で、観る所も限られていたにもかかわらず、句会では多彩な作品が数多く出句され、最後まで盛り上りを見せた。上位三名の方の句は、色紙に揮毫し、桜木小学校と桜木町東部自治



博物館にて

会に贈られることとなった、参加者は最後まで句会参観の佐藤先生を含め五十人。司会は高木事務局長と高橋宗史事務局長。

(高橋健文記)

【入賞者作品】(二句のうち一句)

- ・ 屈葬のはるかな湿り赤まんま 山中 葛子
- ・ 縄文の森のふかふか秋時雨 イザベル真央
- ・ 秋冷の土器の疵から火の匂い 戸邊 光一
- ・ 骨盤の張りたる土偶秋うらら 内田 庵茂
- ・ 縄文の貝に紛れし草の種 下村 洋子
- ・ そぞろ寒イルカの骨の息づかい 野口 京子
- ・ 集落に火の記憶あり秋寒し 岡田 淑子
- ・ 木の実囁む父方の顔縄文系 金子 未完
- ・ 秋の雨縄文の体温にて歩く 大畑 等
- ・ どんぐりの数ほど愛は育まれ 秋尾 敏
- ・ 縄文のグルメ・ファッション木の実落つ 長浜 聰子
- ・ 縄文の館秋思を仕舞えない 林 阿愚林
- ・ 何を残そう貝塚に秋の雨 藤田 富江
- ・ 秋霖の屈葬姿でまどろまん 高橋 宗史
- ・ 待つ待つ待つ旗持って台風 小林 実
- ・ 化石の舟縄文を漕ぎ秋雨を漕ぐ 伊藤 希眸
- ・ 雨句会桜木八丁目の大かりん 保坂ミエ子
- ・ 秋雨や子等は朝から貝を剥く 檜垣 梧樓
- ・ 貝塚公園マムシ注意は呪の如し 高木 一恵
- ・ 海たつた加曾利の丘に木の実降る 保坂 末子

【一般作品】

- ・ ラ・フランス貝塚までの迷い道 岩崎 令子
- ・ 秋深む縄文人の美意識に 木之下みゆき
- ・ 秋霜や貝塚に棲む人の骨 三須 民恵
- ・ 発掘はここまでと決め木の実雨 市川 唯子

秋思ふと縄文の土イボキサゴ	小林 俊子
秋深し縄文人の転居跡	矢野 忠男
秋時雨加曾利貝塚グルメ跡	大塚 弘毅
秋霖に濡れてそぞろ句会かな	棗 梢伊
営みの大穴小穴そぞろ寒	並木 邑人
縄文の夜長木菟形土偶	高橋 健文
縄文の女つれなく秋の雨	吉野 精
菊人形加曾利娘の大き乳	内田 正成
縄文のファミリー集う囲炉裏あと	栃木 きよ
露時雨ドーナツ古墳五千年	佐藤 鈴子
石榴割る縄文の頭骨に歯	細野 一敏
縄文秋雨ナウマン象のいた気配	横須賀洋子
秋雨かな不確かとなる道案内	片岡伊つ美
骨太の縄文土器や栗の飯	立花 洗
落葉踏む縄文への道一足飛び	山崎 幸子
秋雨に加曾利のアサリの冗舌	なかもと淑子
木の実落つ縄文人に会うために	渡辺 澄
秋微雨土器の欠片のつき目より	星野 一恵
木の実降るかそり縄文式リズム	佐藤 晏行
縄文の知恵を長考夜も長し	阿部 良治
雨たたく貝塚万年の夢	竹内 絵視
団栗を拾えば加曾利貝塚に	近藤 榮子
大豆実る縄文土器の出でし畠	鈴木 陽子
二百二十日加曾利に埋めた耳飾り	白木 暢子
雨の丘人の歴史の堆積す	高橋 博

(作品の上の・印は正副会長、幹事長、顧問特選)



一位の山中葛子さん



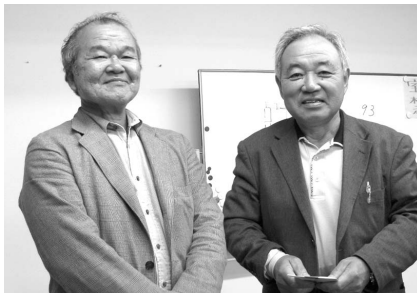
句会風景



二位のイザベル真央さん



佐藤先生のお話



三位の戸邊光一さん

諸家近歌

清水 伶

巡礼のまひるの闇を黒揚羽
ラファエロの瞳のさみだれを見て帰る
秋ふたり一人は半跏思惟像であり
死をねむる母は白花さるすべり
唇のしずかな水位羊歯ひらく

椎名 鳳人

霧浄土かな山頂に穴一つ
神体は蛇ふり向けば豊の秋
谷落しという美技ありぬ峡の月
法師蟬ときおり韻を踏み外し
つくし野のどこ曲がつても童歌

清水 重陽

花散るやうつむき加減の馬優し
行く春や施設の父へ文を書き
芝焼きの風が火を呼び火が風を
おだやかな彼岸の入りの夕日影
山に日の落ちたる甲斐の秋気満つ

千葉 智司

郷関へ戻る術なし蕎麦の花
美しき嘘ありいわし雲朱色
采配は古老の手練れ荒神興
落鮎の終の寂光放ちけり
電子音炭火の終の尉崩れ

庄司とほる

秋茄子は傷つき海の鳴りどうし
雁鳴くや海女の寄せ墓海へ向く
地震あとの栄螺の角の立ちどうし
胎の子が夢みる秋の海の音
残照の海が鳴るなり石榴裂け

鈴木 房州

塩振ってピーパーのごと西瓜喰ふ
遠雷や一閃沖の闇照らす
潮騒を背中で聴いて門火焚く
星とんで長崎の海闊厚し
朝陽背に人阻み立つ牡鹿かな

田部井知子

帰省子と明日のパンを買いに行く
みちのくを行く鬼灯を束にして
この国の敬老の日の知恵袋
風呂敷のマンントの少年天高し
台風一過煎餅のかわいた音

武田 和郎

話の尾投げて交差の半仙戯
片違いに上り相発つ夏暁駢
音のある絵巻を捲る花火の夜
色なき風総の国には峠無し
狩人はことばの山へ勢子放つ

立花 洸

優曇華や喰へぬ魚を釣る老人
夏の雲映し太古へ戻る沼
蟻地獄えものを捕ふ音のなし
南天の花に実をみて筆を擱く
花南天こぼし少年走りゆく

塩野谷 仁

血の薄き日なり金魚の浮く日なり
夕顔を数えておれば夜汽車くる
石榴熟れむかしわれらに礫癖
引力の薄らぐあたりからす瓜
なんばんぎせる人人は水に帰る

関根 信三

いつの間にもう秋預かりしいのち
路傍なる落葉とともに佇みぬ
赤い星みつめて飛び熱帯夜
涙滂々焼尽の敗戦日
再生の夢を叶えて藪がらし

鈴木加寿子

きさらぎの眼科心眼覗かれる
アベノミクス無縁の路地裏恋の猫
捨て切れず枳殻垣に棘される
無機質な椅子軋ませる九月尽
躓いて踏んづけている含羞草

高橋 健文

たちあふひ空に残りし端色
緑蔭に鶏と人間農学部
角出して長考に入るかたつむり
立ち尽くす向日葵のみこみし言葉
かき氷崩す木の間に波見えて

谷本 元子

月光をノートに朧りけふを閉づ
ほうきなどいらぬと魔女が春疾風
落暉いま千のひまはり炎となりぬ
ほろ酔ひの酒に銀河の一雫
幸せの寡黙を通す青みかん

鈴木 敬治

鎌倉の海を遥かに曼珠沙華
秋晴や極楽寺という駅に降り
拝観無料撮影禁止萩の寺
「生シラスあります」古都の秋の空
江ノ電の家並を抜けて秋の海

諸家近歌

田沼美智子

人体のあまたの出口山笑う
蛤の虫偏易く喉とおる
愛さるる庖丁式の花うぐい
花ぐもり肉体とどめようもなく
体毛はヒトの触覚春の山

白鳥 可桜

秋燕斜めによぎる大沃野
手芸品丹念に見る文化祭
懸命に生命を燃やす秋の蝶
流麗な恩師の朱筆一位の実
閻魔王の舌かと思う曼珠沙華

清水三千代

かなかなは時空の岩に爪立てる
案山子立つ渾身四方の田の舞台
星々の生死の行方冷まじや
葉喰見かけ倒しを飼い馴らす
煤迷やネオンに解けし頬被

鈴木 郁子

煮凝りにつながっている北家族
芦の風傷が癒えたらパン屋まで
水音やさくらの裏にいくさあり
エジプトは永遠なのか汗の訃音
膈の弾力が欲しどくだみ干す

竹内 絵視

うねる丘諸霊いたわる花木種
海鳴りの歳月重さね鳴らすほほずき
草取に眼小さく輝る桔梗
発火点深山幽木姫紫苑
四十度越える四万十壊すか日本

高桑 弘夫

原発や角を出せないかたつむり
梅雨晴間原発なにも無けりやよい
能です狂言です原発再会村
麗かやうらは頭痛持ちの歌
生きる面倒死ぬる億劫あみだくじ

高桑 婦美子

白寿越え目指す師とあり梅の庭
沈黙のはじめに春の放射能
花吹雪ここは最前列である
梅を干すいくたび闇を抜けてきた
炎昼の忘れたものに灰と雨

高橋 富久江

咽せるごと雨の新緑深大寺
梅干して闇をすっぽくしておりぬ
命樽も磯着も滴り海女あがる
一步あゆめば一步の雫あがり海女
いつも何か忘れし不安水母浮く

武田 伸一

海石榴市を通りしは四度葱坊主
寒稽古卑弥呼と寝たことぼると言う
種袋種と空気といっしょよくた
鰯酒やあん畜生のかたわらに
突き刺さる光の晩秋菜食主義

高橋 由紀子

瞑想に形があれば枯はちす
吾亦紅とびとびに私語とどめをく
億万の芽吹きに大地温もれる
向日葵の背向き前向き反抗期
虫干しの匂ひの中に母が居る

田端 重彦

四度攀づ凱風富士の山開き
兼好のつれづれはゆめ明易し
棒道に戦意の見えぬ墓蛙
線量の有無は問ふまい未草
南木曾路の秋日ゆらめく虫籠窓

高橋 宗史

白梅や馬柔らかに引く女
遠ければ遠いほど白花こぶし
数百の影あり数百の目高
鶏頭が歩き出しそう村の昼
晩夏かな二足歩行の影一つ

鈴木 和子

田の眠り覚さぬように年明けける
五才児の言葉鮮やか初笑い
朧夜の四柱推命信じそう
伝言となりて青田を風渡る
緑陰のサツカー少女夢躍る

田中 しのえ

我が山河恋しくなりし栗ご飯
来し方を語るふたりや衣被
夕映えや海に浮き立つ秋の虹
ショパン曲色なき風の中流る
無量寿の仏と向ひ秋気澄む

重田 忠雄

全山が空海の山天高し
深爪の疼ぎだしたる原爆忌
音たてて沈む夕日や沖繩忌
赤い灯の窓際未婚の雪達磨
子が先に逝きし十年日記買う

諸家近歌

杉山眞佐子

浮世絵の目の寄る都心冬紅葉
ヒソップ茶薔薇色木枯の熱く
落葉搔き人は大地に愛されて
指潜らせて花むすび冬泉
切り取った切手の日付雪女

小林 実

銀漢濃し夜汽車いつしか濡れており
聖五月たかあし蟹の面構え
魍魎が出窓を囲む熱帯夜
灯それぞれ鬼灯市の初日かな
底冷えの鍵を開けると荒野かな

木之下みゆき

東京の新陳代謝ゆりかもめ
人も石も無辺に積まる暮早し
福音呼ぶか黄落に友好の旗
蓮根を立たせ侍らせ華燭なり
政治の動く町に色変えぬ松

久保 筑峯

摩天崖白馬駆け行く夏怒涛
夏怒涛昭和の渚駆け抜ける
来し方をばさつばさつと夏蜜柑
八月や瓦礫の塀の生死分け
古代蓮憲法9条噛み砕く

佐藤 映二

桃の日や欄間に跳ねる駒の尻
いくつもの手が出て菩薩あたたかし
この花筏ならばかの魂寧からむ
箱庭や人形埋め祈れる子
たんぼの茎鳴らしゆく吾は無頼

私の感銘句

高木 一恵

作者名 号頁

被曝の牛岬の鼻に出てしまふ
夢狩と書いて折りたる氷柱かな
肉体を影が支えて冬日射し
放射能の汚染新米モツタイナイ
今年竹なぶるパンダの本気貌
永遠の列から零れ雲雀笛
寒紅梅胸にあたため妻癒えよ
初雪や一本の松千の牛
未来少々藤のむらさき本気なり
ぐんぐんと土手の夕日に還る母
未来少々藤のむらさき本気なり
山中 葛子 107 6

藤のむらさき：光源氏が愛した藤壺の女御に
生き写しの、紫の上の彩である。花房の尖が咲
く頃には、房元の花はすでに萎れている。未来
少々、けれど本気で己がむらさきを極めるのだ。
〔水時計河骨の花になるまで〕〔春無限わたくし
を野道と思ふ〕と詠む作者の宇宙感覚を通して、
内に秘められた心象がやわらかく伝わる。余命
の意識を持ち始めた昨今、香り高い藤の花の
「本気なり」の思いが一層身に沁みる。

小張 直子

日暮また人泣きにくる大冬木
秋日傘あなたの時間ぬすみとる
さよならを二度も言わせて細雪
啓蟄や出口の見えぬ耳朶の穴
亀鳴きてそこより大地割れにけり
流れつくところを萍浄土とす
桜散る知らない方がいいことも
塩野谷 仁 104 2
鈴木 郁子 104 4
木之下みゆき 104 4
千葉 智司 105 8
中島玄一郎 105 9
実籾 繁 106 2
中村 冬美 106 4

失うは愛胸元を蝶よぎる
藤田 守啓 107 4
苺ジャム煮て家中をパンにする
保坂ミエ子 107 5
雨おんな顔からころび青母郷
山中 葛子 107 6
桜散る知らない方がいいことも
中村 冬美

一読してこの齢まで生きて来ると、作者の人柄
と人生観が滲み出て居て自然に納得させてくれる
作品に出合えた様に思う。人は色々な事柄に出
合い、色々な経験をして、人間として大人になり
成長して行き、豊かな心情の持主になって行くも
のです。真実を追求し心が傷つく場合も多く、何
も知らずに知らないままに生涯を送る場合が幸福
な事も多い筈と思う。この桜散るの季語が私達の
年代と相俟って心に響き親近感が生まれました。

山崎 幸子

日暮また人泣きにくる大冬木
肉体を影が支えて冬日射し
月も山も象形文字や月上る
生涯に父はいませず冬の海
寒波くる都会を魚の顔をして
新しい四月は角が多すぎる
待春の茫々たる水のまわり
悪妻に時効などなしけむり茸
ぐんぐんと土手の夕日に還る母
恐竜の骨を大事に山眠る
生涯に父はいませず冬の海
生涯とは、この世に生を受けあの世に逝くま
での生きている間と見る。掲句を自分と重ねれ
ば、父の最後は戦地で終戦間際に戦死する。父
の記憶は無い。
掲句は余分な事柄を言わず、上五中七でその
事実のみを端的に表現する。
海辺育ちで、また父は海を越え南の比島で戦

死しているので思い入れも大きいので、冬への海”の季語の斡旋に領ける。俳句の奥深さを感じている。

田端 重彦

過疎村の声を集めて秋祭 清水 重陽 104 2
 逃げ水や真水で洗う文明論 高木 一恵 104 2
 立春やまだ空つぼのランドセル 高橋由紀子 104 3
 残生をさくらさくらとしめくくる 長浜 聰子 105 8
 シクラメン児は逆立ちの練習中 羽瀨 順子 105 8
 妙齡の妬心のごとしアマリリス 長井 寛 106 2
 仏心も鬼心も大事雲の峰 増田 斗志 106 3
 この世から少し離れて鳥渡る やち 坊主 106 3
 晩節の胸に聳ちたる青嶺あり 八重樫弘志 107 5
 山笑う半眼あけてみる下界 山中 頼子 107 6

大村 錦子

徳利に菊挿してやる禁酒の後 村上 巨拜 107 4
 伊八の波しづくとならばほうたるに 村中 三好ひろし 107 4
 朝顔市母はツノなき鬼となれ 藤田 守啓 107 4
 蟲干の家に戻りて年を取る 山中 自游 107 6
 蟻螂に聞きし余生の過し方 山中 葛子 107 6
 はつとふたりどきつと茸飯の夜 山中 葛子 107 6
 未来少々藤のむらさき本気なり 山中 葛子 107 6
 悪妻に時効などなしけむり茸 山中 葛子 107 6
 椎の実やおまかせ余生に甘んじる 山端かずみ 107 6
 たそがれのJUSCOの空をヒエロ歌 松澤 龍一 107 6
 伊八の波しづくとならばほうたるに 村中 三好ひろし 107 6
 みちのくたろうさんの句ですからあの3・11 107 6
 の被災とかかわられたか。もしそうでなくても、
 この心境吐露に、深い詩心を感じます。伊八の
 波とありますが、どのような海辺かは存ぜぬな
 がら、天災を過ぎた後のこの静かな心境が伝っ
 てきます。

藤田 守啓

崩れそう泣きそう笑いそうな雪 三須 民恵 107 4
 月光を拾えばほのと毀れけり 森村 文子 107 4
 遠野よりとおいところが青胡桃 門谷 杜人 107 5
 水中花浮く直前であったのか 渡辺 澄 107 5
 自由席へどうぞ余生の花筵 保坂ミエ子 107 5
 冬の月人形町を通るとき 山崎 聰 107 6
 今日生きて今日の傷もつ蝸牛 山崎 文子 107 6
 はつとふたりどきつと茸飯の夜 山中 葛子 107 6
 転生し苺となりし天使の血 吉野 精 107 6
 コツコツと革の匂いの女医が来る 松澤 龍一 107 6

新会員・会友紹介

千葉県中央区 増田 忠彦(会員)
 (推薦者 青木恵美子)
 秋深し背すぢ伸ばして万歩計
 アイフォードコモかしこも文化の日
 水澄むや木の香あらたに神つ宮
 香取市佐原 坂本 正夫(会員)
 (推薦者 秋尾 敏)
 さわやかと応え真実明かさな
 人間の隙が花野を魅せにけり
 止められぬ心の思い赤い羽根
 流山市野々下 松澤 伸佳(会員)
 (推薦者 秋尾 敏)
 冬窓にやさしい水滴憎らしい
 左右の手温度が違う桜桃忌
 白守宮同じ匂いの人探す

柏市篠籠田 薄井 智介(会員)

(推薦者 秋尾 敏)
 星冴ゆる生命体という揺らぎ
 曼珠沙華妻も昔は毒を持つ
 大古より着信ありて天の川
 袖ヶ浦市三黒 大地 節子(会員)
 (推薦者 長浜 聰子)
 病む夫を咎めて詫びる秋の蟬
 さわやかをひとり占めして野良仕事
 連れ立ちて三人姉妹花野道
 流山市東深井 川上 典子(会員)
 (推薦者 秋尾 敏)

千葉県稲毛区 首藤こころ(会員)

(推薦者 秋尾 敏)
 初買いは自分を好きになる眼鏡
 忘れるという選択肢鳥雲に
 遮断機の降りて上がって夏の恋
 ポインセチアいつまで海を悲します
 ふところに海の断片冬木桜
 火の海のかなたにありて月の里
 松戸市栗ヶ沢 林 ゆみ(会員)
 (推薦者 塩野谷 仁)
 大花野背もたれのなき椅子に座す
 地の声を椎茸のひだ吸ひてをり
 廃棄物も電力もなし馬肥ゆる
 松戸市松戸 神尾 浄水(会員)
 (推薦者 鈴木 明)
 方眼の君からの死角龍の玉
 微分積分などは枝垂の花後にして
 初稽古市松模様の会話飛ぶ

千葉市稲毛区 棗 榑伊(会員)
(推薦者 田島 健一)

登高や城の天守は博物館
新涼のJAZZストリートBAYサイド
落葉掃く脇急ぎゆく千葉都民

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

●第二五三回(平成二十五年六月十二日)

司会 金子 未完

丁寧	に視られ脳内早かな	小川	実
内視鏡	モニターにふと朴の花	大塚	弘毅
白髪	を三つ編みにして青葉風	股野	久子
打ち水	の最後の水を遠くまく	後藤	章
九条	を論じ空豆減ってゆく	吉野	精
白薔薇	あなたでしたか振りかえる	白木	暢子
立葵	ぐんぐんひらく自由律	岡田	淑子
バナナ	の皮剥きながら鏡見る	楠見	恵子
ところ	でん痒いところを突くように	横須賀	洋子
俗名	を思い出せぬも筍飯	大畑	等
手の内	をみせぬ男の白緋	大村	錦子
血糖値	一喜一憂柿若葉	なかもと	淑子
夏みかん	酸いも甘いも知らぬふり	林	阿愚林
オードトワレ	触れぬ神のよぎりけり	佐藤	晏行
蛸	を壺侵入罪で連行す	金子	未完
でで虫	やスクランブルのハイタッチ	村上	澄子
なお遠く	迷いこんだる薔薇の園	希田	沙知子
花空	木艶治八海山無骨	榑垣	梧樓
花栗	や寂びゆく雨の殺到す	山中	葛子

●第二五四回(平成二十五年七月九日)

司会 楠見 恵子

蛇死	んで少し笑つてゐるごとし	楠見	恵子
海亀	と五体投地をしてをりぬ	佐藤	晏行
父の日に	父とは何か眠くなる	吉野	精
更衣	やつと重荷を降ろせませ	林	阿愚林
水打	つて石の模様をあきらかに	後藤	章
仏壇の中	こみ合えり土用波	岡田	淑子
バルザック	なんか読めないこの猛暑	大村	錦子
未亡人	怖い怖いと蚊を叩く	横須賀	洋子
そちら	にも咲いていますか文字摺草	股野	久子
貝殻	のボタンの光る梅雨の明け	村上	澄子
カンナ	咲く我にも欲しき兵馬備	大塚	弘毅
鬼籍	まで蓮の葉の傘かがげゆく	山中	葛子
牛冷	やす過去は迦葉にとくと聴け	榑垣	梧樓
この家の	いつからここに水中花	大畑	等
夕茜	アメリカカ橋つて此処ですか	小林	実
殿と様	どつちが偉い棒振虫	金子	未完
拍子	抜け短かき梅雨のその先は	なかもと	淑子
どうして	のこたえを聞けず日日草	白木	暢子
一気	に夏背もたれ堅き椅子に座し	希田	沙知子

●第二五五回(平成二十五年八月十三日)

司会 後藤 章

原っぱ	も浜辺もなく夏帽子	金子	未完
ほととぎす	師ははばかりにいきしまま	佐藤	晏行
夜店	より明るかりけり闇魔堂	後藤	章
釣銭	のふえてゆくなり花火の夜	山中	葛子
献体論	ソフトアイスが溶けている	大村	錦子
八月	の夜汽車いつしか濡れており	小林	実

青葉研究句会報告

(於：千葉市市民会館・第五会議室)

●第二十四回(平成二十五年六月二十七日)

司会 山崎 幸子

たくさん	のひまわり富士に喝采す	吉野	精
青光り	のべべ着て累々こがね虫	なかもと	淑子
永らえる	金魚のバカと眩やきぬ	横須賀	洋子
空蟬	にも脊梁山脈が走る	榑垣	梧樓
蓮の実	のほのかな甘み舟下りる	希田	沙知子
幽霊	の腰に膏葉はつてやる	岡田	淑子
風鈴	の何でもない日のイスラーム	大畑	等
八月	の僧八月の夢一夜	林	阿愚林
蓮池	のしづかなところ首長竜	楠見	恵子
被爆	の地緑の木々に蟬鳴けど	大塚	弘毅
赤煉瓦	ヒロシマの日の温度計	白木	暢子
ゆつくり	と老いるも遊び浮いてこい	芝崎	梓
人間	を休みて蟻の列につく	鈴木	陽子
シャワー	浴ぶあいつに負けてなるものか	加藤	法子
天辺	はあした咲きます立葵	榑	良松
少年	の長靴蟬蚪の仮住い	石井	紀美子
四次元	の換気口なり山法師	並木	邑人
水と反り	合はぬやうなり水すまし	長谷川	千枝子
蟻地獄	見る幸せの裏を見る	馬淵	津枝
隕石	や秘密を孕む落し文	小高	稔
オカリナ	の半音狂う夏はじめ	矢野	忠男
慈悲心	鳥遙かなものへ折りたる	山崎	幸子
尾の失せ	ぬ蛙顔面蒼白に	細野	一敏
偶像	に見えてしまったサングラス	長浜	聰子

●第二十五回 (平成二十五年七月二十五日)

司会 矢野 忠男

仏法僧森に大きな耳ありて 芝崎 梓
 朝曇銀座路地裏室外機 鈴木 陽子
 羽抜鳥高鳴る胸のありにけり 長谷川千枝子
 風鈴の風はやさしく自由律 山崎 幸子
 振り花まならぬからおもしろい 馬淵 津枝
 ものの怪のときどき騒ぐ夜の新樹 長浜 聰子
 油蟬やぶれかぶれの意地通す 石井紀美子
 蘭奢待なる酒酌みて月を消す 並木 邑人
 夏の月喜劇役者は夜笑う 矢野 忠男
 ちちははは永遠に留守して沙羅の花 椿 良松
 玻璃越しの守宮の腹に動く謎 大塚 弘毅
 廃炉への試練のみちや草茂る 小高 稔
 緑陰の合掌青僧の小径 細根 栗
 折鶴の行方折から巴里祭 細野 一敏
 縞甚平若い奴等を口癖に 加藤 法子

●第二十六回 (平成二十五年八月二十二日)

司会 小高 稔

八月の握り拳の中に石 加藤 法子
 八月の水掴んでも掴んでも 芝崎 梓
 緑陰に羽ばたくまでを石でいる 長浜 聰子
 はは捨てた日の夕焼けが又焼ける 細野 一敏
 揚花火祈るかたちにひらきけり 鈴木 陽子
 荔枝の子ぶらぶらいのち肥えていく 椿 良松
 風死して断崖というサスペンス 細根 栗
 髪切らな又髪切らなやつと秋 長谷川千枝子
 八月の真つ暗な海眺めけり 山崎 幸子
 ちはははとなりたる風や魂迎え 石井紀美子

柏研究句会報告

(於：柏市「ハックルベリー」二階)

●第十四回 (平成二十五年七月十三日)

司会 栃木 きよ

小昼来て枇杷の実灯る結びの里 長井 寛
 抱卵へ雨の紫陽花修飾す 野口 京子
 髪染める額紫陽花が咲いたから 岡田 春人
 浮草や人に呼ばれて鯉鳴けり 伊藤 希眸
 初夏の少女眩しき膝頭 小張 直子
 金槌と釘抜きがあり黒揚羽 大畑 等
 強がりやをわざといふ癖酷暑かな イザベル真央
 鬼百合をいちぢめてをりぬ谷の風 栃木 きよ
 ひぐらしや抱き抱かれひとは老い 下村 洋子
 風を読む老船長の喉ぼとけ 松澤 龍一

●第十五回 (平成二十五年八月十日)

司会 栃木 きよ

友達になれそう窓の糸とんぼ 野口 京子
 花芙蓉あやうさ秘めて昼開ける 小張 直子
 雲の峰延命水を喇叭飲み 栃木 きよ
 凌霄につかまっている夕日かな 岡田 春人
 大いなるものには飽きて真昼の鶴 大畑 等
 からつぼの子宮にひびくかなかなかな 下村 洋子
 魚の目食べて極暑をやり過ぐす 伊藤 希眸
 坂多き街黄昏のフアデイスタ 松澤 龍一

●第十六回 (平成二十五年九月十四日)

司会 栃木 きよ

純白の乳歯一本九月来る 栃木 きよ
 野分雲へ黒きくちな爪の跡 佐藤 鈴子
 ちちろむし白きペンキの刷毛干さる イザベル真央
 近道の坂は基地裏木の実降る 小林 俊子
 あだし野の骨片なりし月見草 下村 洋子
 初さんま枯淡海となりし月見草 長井 寛
 夕立やおとこおんなを輪切りにす 大畑 等
 悪人の物的証拠サングラス 岡田 春人
 それぞれがそれぞれの事良夜かな 野口 京子
 鳥渡る吾が青春に藤圭子 松澤 龍一

図書紹介

■句集『木椅子』 谷本 元子
 平成二十五年八月七日 文學の森刊
 風よりも低くかがみて董摘む
 後退りせるや花桐見ゆるまで
 小春日の木椅子きのふとおなじひと

《会員・会友の近況》

・俳誌「秋」に所属しております。なかなか東京の例会に行けない状態ですが、「秋」のインターネット句会にて細々と勉強を続けております。インターネット句会の「秋」会員は皆、若く手強いです。(鈴木 房州)
 ・初めての投句です。十月二十日の吟行会には、木下の吟行に続き参加させていただきます。よろしくお願ひします。(立花 洸)

・「俳句とは公案に似て青葉闇」最近の心境です。
(関根 信三)

・秋の鎌倉、混雑する週末を避け、平日に休みをとって散策をしてきました。のんびりとした充実の時間を過ごせました。
(鈴木 敬治)

・下手の横好きと申しますが、俳句は一向に上達しないので主宰に注意されていますが、やはり好きなのでしょうが続けて行きたいと思っています。
(白鳥 可桜)

・最近妹ふたりに先立たれました。十二月で八十七歳、つくづく残り僅かを痛感。何とか生死を越えたい心境です。
(竹内 絵規)

・昨年春から妻と「奥の細道」の足跡を辿る旅を月一回している。今年は五月から再開し、十一月の第十六回の旅で結びの地、大垣まで行く。
(田端 重彦)

・読書三昧といきたいのですが、いろいろ怠けています。
(高橋 宗史)

・先日のミニ吟行ではお世話になりました。忘れないうち「諸家近詠」の五句を出しておきます。今日出されたの句三句、先月できた句が一句、二十年前の句が一句です。おっと、近詠でしたね。これから作ります。
(小林 実)

・所属する結社「岳」の三十五周年記念大会を終え、改めて、俳句はひろく他者とのつながりを強めるものであってほしいと願う。
(佐藤 映二)

掲示板

《会員・会友異動》

● 逝去 (会員) 福島由紀恵

● 入会 (会員) 山崎公子
(会友) 田村隆雄

● 退会 (会員) 河津智子、川津光子、篠田香子
(会友) 馬淵津枝、伊藤利子、

● 移転 久保筑峯
佐倉市西志津(番地のみ変更)

● 俳号変更 徳吉洋二郎(旧 徳吉 洋)

● 平成二十五年第三回幹事会

日時 平成二十五年八月二十七日(火)

場所 船橋市勤労市民センター
出席者 大畑、秋尾、渡辺、並木、檜垣、内田、高木、高橋(宗)、野口、松澤、上野、大塚、小高、木之下、山崎、久野、小林(俊)、小林(実)、小張、白木、高橋(健)、林、星野、細野、森村、矢野、吉野
(敬称略、順不同)

議題

- 一、平成二十五年秋の吟行会について
- 二、第一一一号会報について
- 三、現代俳句協会(本部)の動向について
- 四、第二十回関東甲信越・静ブロック連絡会議報告
- 五、平成二十六年三月十六日(日)の総会・俳句大会について
- 六、印西ミニ吟行会報告

- 七、各研究句会の状況について
- 八、十一月の幹事会の日時・場所について
- 九、その他

- ① 会員・会友の入退会状況について
- ② その他

事務局・編集部だより

● 秋の吟行会(加曾利貝塚)に参加された皆さん、どしや降りの中ご苦勞様でした。

● 平成二十六年度俳句大会の作品募集をしております。締切は来年一月三十一日です。どうぞお早めにご応募下さるようお願いいたします。

● なお、会員以外の方、他地区会員も参加できます。

● 「諸家近詠」では、皆さまのご投稿が予想以上に活発で、多くの方のご投稿分を次号に積み残してしまいました。今号に載らなかった方、ご了承下さい。

<p>現代俳句千葉 第一一一号 平成二十五年十二月一日発行</p>	<p>発行人 千葉県現代俳句協会 会長 大畑 等</p> <p>現代俳句千葉編集部 〒278-0037 野田市野田六六五番地 千葉県現代俳句協会事務局 〒270-1471 船橋市小室町二八〇四 高木 一恵</p> <p>電話 〇四七-四五七-二九一二 FAX 〇四七-四五七-二九七二</p>
---------------------------------------	--